

研究協議会記録

1 研究の視点

スポーツを「つくる／はぐくむ」という活動は、生徒がエージェンシーを発揮する場面としてふさわしい活動であったか。

2 自評

○スポーツを「つくる」はスポーツ振興計画に組み込まれたもので、指導要領の中にあるものではない。

しかし、豊かなスポーツライフの実現や、保健体育におけるウェルビーイングへ向かう生徒の育成をねらいとして設計した。

○本時のメインは行動と振り返りであった。中学校3年間で経験したことや部活動などの経験を踏まえて、小学生と行ったら楽しめるスポーツを考え、実践してみた。実際に行ってみると、「自分たちが難しいと感じる」実践や、「自分たちは簡単だと思っているが、他から見ると難しいと感じる」実践があった。

○前時までに「小学生も中学生も楽しめるスポーツ」を考えた。ゆるスポーツ、パラスポーツなどのキーワードを与えたり、体育理論での学びを振り返らせ、「同じチームと一緒にスポーツをする良さ」や、「スポーツの価値や面白さを小学生も中学生も味わうこと」などについて考えさせたりした。しかし、生徒の思考はなかなか既存のスポーツの域から出ない様子もあり、新しいスポーツをつくる大変さを感じた。

3 質疑応答

○今後、勤務地でも男女共修になっていく予定で、まだ男女生徒が一緒に体育の授業を受ける様子が想像できない。他の体育の授業で、男女でスポーツをする際に差を感じるところはあるか。

→男女で共通の課題で授業を行うことが共修では大切。ネット型の競技では、兄弟チームとして、男女各4人のチームにして、男子が試合をしている時、女子は記録やアドバイスをするなどの取組を行っている。このように、能力差があっても互いが楽しめるよう工夫し合っていくとよい。

○今日の授業で「メタ認知」を発揮させたところはどこであったのか。

→「こうできるだろう」という予想立てて、実践したところ、振り返りでは「実際にやってみてうまくいかなかった」「他の班員からも難しそうと言われた」という意見が出てきた。この様子から、メタ認知力やモニタリングする力が少し発揮できたのではないかと思う。メタ認知は基本的に、「自分は、何ができて何ができない」という、個人のことはではないと言われているが、今回のこの活動に関しては、客観的に自分自身が見えているかどうかを、メタ認知として捉えている。

4 意見

○どんどん作り変えて、既存のものを打ち破っていくというエージェンシー。本時はAARの時間のそれぞれの時間が切り分けられていた。あらゆるところでコミュニケーションがあるような、もっとダイナミックな授業ができるのではないかと感じた。たとえば、チームの半分の生徒が実践をしてみて、半分の生徒は他のチームの様子を見て、話し合いをするなどにより、良さを強化していったり、作り変えたりと、活動がより活性化していくのではないか。

○既存のスポーツや、対抗という考えに固まってしまうのを乗り越えるには、別のものを持ってくると良いと思う。「ネット型×□」で、例えば「ネット型×布」などアイデアが広がるのではないか。